

みーりゃん

と

卑猥なダンジョン



R18

成人向け

ここから進める
のは水路と：

粘液まみれの
通路しかないわね

どちらに進んでも
嫌な予感しか
しないけど：

君は粘液の流れる水路を進んでも良いし、粘液まみれの通路を進んでも良い。が、今回は通路を進んでもらう事にする。

はああああっ！

大きいモンスター
だったけど
あまり強くなくて
良かったわ

ふう？

他にはもう
いないみたい

ふん

ん





きやあああ!



そんな、体内に別の
モンスターが
いるなんて……

力が抜けない：
このままじゃ：

あ：この
ヌルヌル：

ああっ
嫌あ！

ググ

ヌル

ヌル

ヌル

ヌル



ググ



まさか...



な、何なの
それ...



ああつ
やめてっ



はひいっ!!

ウ
ガク

だ、だめえ...
ヌルヌルが
直接...っ

ウ
ガク

ウ
ガク

んっ...ふあっ
そ、そこダメえっ



アッアッ

スト

アッ

んっ
んっ

おん!!

アッ

アッ

アッ



あつ
それまさか…っ

ダメっ
これ以上は
ゆるしてっ

グ
グ

今挿れられ
ちやったられ
私もう…っ

ス
ス
ス

ス
ス

うあああ
ああっ！

だめえっ
ヌルヌル奥まで
きてるっ

そんなに激しく
しないでえ!

あああっ!
そこ敏感すぎるのぉ!

墮ちちゃうっ
わたしもう：
もう：





お・お・お
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ
グッ
グッ

もう・気持よすぎて・
何も考えられない・

グッ
グッ
グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ
グッ

グッ
グッ

グッ
グッ

「くっ！ こ、こんなのって……！」

どれだけ剣を振るっても、まるで攻撃が通じない。

粘塊状のボディは斬撃を飲み込むように無効化し、鞭のようにしなる無数の触手は切断してもすぐさま再生してしまう。

まったく有効打が見つかからない——戦いを続けても疲弊するだけで、まるで勝てる見込みが無い。

これまで数多のモンスターを倒してきた高レベルのファイターであるささらにとっても、こんな苦しい戦いはじめての事だった。

「はあ、はあ、はあ……つく！」

苦しげに吐息が溢れるたび、ビキニに守られた巨乳が蠢惑的に揺れる。整った麗貌には疲弊の色が濃く、瑞々しい肢体は吹き出した汗に濡れていた。

長時間の激しい攻防、しかも光明の見えない戦い。さしもの高レベルの冒険者とはいえ、流石にスタミナの消耗は免れないのだ。

（これは……一体……？ こんなモンスター、初めて見るわ……！）

それでも油断なく剣を構えながら、ささらは冷静に思考を巡らせた。ダンジョン下層で遭遇した、正体不明のモンスター。外見はスライムに近いが、遥かに巨大で、そして醜悪な外見をしていた。

小山のような巨体は常にポコポコと脈動を繰り返す、おぞましい粘液をドビュドビュとひっきりなしに吹き出している。不定形の肉体系からは、何本もの触手が伸び出して蠢いていた。それらの触手は不定形の本体同様のゲル塊で構成されており、変幻自在に伸縮・膨張を繰り返す。今も切断したばかりの触手が早くも再生を終え、粘液をまき散らしながら襲いかかってきた。

「くっ！ こ、この……！」

ヒュンツ……ザシュツ！

鞭のようにしなる触手を必死で回避し、剣を奮って反撃するささら。

ゲル状の触手はあつけなく切断されるも、液体を切っているようでまるで手応えはない。ぶしゃああつ、と撒き散らされた体液が、べつとりと全身に降りかかった。

「んっ……く！」

ヌルヌルした返り血の感触に、思わず眉を顰めるささら。その間にも切断された触手はすぐに再生し、新たに襲いかかってきた。

（やはり……剣が効いていない！ これは……このままじゃ……！）

あるいは魔法やそれに類する武器ならば、有効打を与えられるのかもしれない。だが打撃一辺倒のファイターにとって、それは無理な相談だ。

持ち前の冷静な判断力で推測するささらだったが、だからこそ、心の中に広がる不安は打ち消し用がない。

（ど、どうすればいいの……？ わたし一人では、このモンスターは倒せない……！）

焦燥と不安が、心の中に広がっていく。

普段の仲間がいれば……パーティだったら、あるいは問題なく倒せていたかもしれない。

だが今はファイターである自分一人だけ。決して慢心があつたわけではないが、それでも、このようなクエストなら自分一人でもクリアできると思っていた。

だが、しかし——このモンスターは、いくらなんでも相性が悪すぎる。

「はあ、はあ、はあ……つく！」

右方向から飛来する触手を切り裂き、同時に左からのそれを盾で防いでやりすこす。

動きはそこまで早くはない、回避するだけなら造作も無い——だが、それを繰り返していても決して事態は好転しない。

いくら高レベルのファイターとはいえ、スタミナは有限なのだ。光明の見えない長時間の戦いは、普段以上に体力を、そしてそれ以上に精神力をすり減らしていく。

ゆえに——ささらは、普段ならありえないような致命的なミスを犯してしまったのだ。

「!? あっ……う、あっ!?」
ぬるっ……にゆるんっ!

素早くステップを踏んで回避しようとした、その瞬間。ブーツの靴底が、ぬるりと滑った。

(! これは……怪物の粘液……!?)

気づいた時にはもう遅い——迷宮の床は、切断面から吹き散らかされていた怪物の粘液によって濡れそぼっていたのだ。

ヌルヌルと滑るジェル状のぬかるみに足を取られ、ささらは不様に体制を崩してしまう。

「し、しまっ……あ、ああっ!」

緊迫した戦いの仲、一瞬の隙は致命的だ。容赦なく振るわれた怪物の鞭が、少女の身体を打ち据える。

「うあ……つく! あ……く、あああああっ!」

ピシッ! パシ、ビィィイ! パシ、パシィイ!

体制を崩し防御姿勢もとれないところに、嵐のような触手の連打。

凄まじいダメージに、もう得物を構えていられない。カラン、と絶望的な音を立て、身を守るための剣と盾が床に落ちた。

「あ、ああっ! しまった……つく、あ、あああああ!」

ヒュンッ……ピシ、パシィィイッ!

武器を拾おうとしたところに、またしても容赦無い鞭打の嵐。さらにはスライム本体から夥しい量の粘液をぶちまけられ、回避も防御も出来ないささらはそれをまともに浴びてしまう。

「うああっ……あ、や! こ、こんな……う、あ、ああ……!」

ヌルヌルとヌメリながらも肌に吸い付いてくる、濃厚極まりない白濁の塊。露出度の高い装備ではまるで守ることも出来ず、玉の美肌を直接ねつとりと汚辱されてしまう。

(うあ……ぬ、ヌルヌルして……あ? 何……ち、力が……!?)

直接肌に染みこんでくる感触だけでもおぞましいが、スライム粘液の効果はそれだけではなかった。

全身から力が抜け、酩酊してしまったかのように意識がふらふらとする。両足はガクガクと震え、もう立っているだけでも精一杯だ。

「こ、これは……あ、ああ。い、いけないっ……ん、ああっ!」

ヒュンッ……パシィィィイッ!

さらに追い打ちの攻撃を直撃され、その場にくずおれるささら。粘液まみれの床へと、そのまま成すすべ無く倒れこんでしまう。

「はあ、はあ、はあ……つく! こ、こんな……う、ああっ!」

なんとか立ち上がろうとするささらだったが、身体にまるで力が入らない。必死に両手で身体を支えようとするも、粘液まみれの床でヌルヌルと滑ってしまうだけで、倒れこんだ姿勢から立ち上がれない。

(くっ……ど、どうして? 全然力が入らない。ヌルヌルが染みこんで……身体が、お、おかしい……っ!?)

粘液の効果で生じた身体以上は、脱力感だけではなかった。おぞましいヌルヌルを浴びせられた肉肌が、徐々に熱を孕んでくる。

風邪を引いた時のように身体がだるく熱を帯びて、ぼうっと意識が霞んでしまう——

「はあ、はあ、はあ……あ、ああ。く、う、う……!」

苦しげに漏れ出す吐息が、喘ぎにも似た甘い熱を帯びる。

胸が高鳴って、身体が熱くって、どうしようもなく切なくて——
(ああっ……い、いけない! これは……ま、魔物の媚薬……!)

理性を狂わせ、肉体を猛らせる危険な毒効——女性を好んで襲う魔物の体液には、そういった媚薬効果が含まれている事は珍しくない。そんな危険な媚薬を、露出した肌全体でたっぷりと浴びてしまったのだ。瑞々しくも初心な女体は、一瞬にしてその膚に墮してしまふ。「はあ、はあ、はあ……つく、んんんっ！　だ、だめ……こんな……はあ、あ、ああ……！」

胸が高鳴る、下腹が熱い——淫らな疼きが加速度的に増していく。漏れだす吐息は甘さを増し、怜悧な美貌は惱ましく紅潮する。

（だ、だめ！　こ、こんなときだからこそ、平常心を保たないと。でも……こ、こんな……もう……！）

もう、抗えない——耐えられない。

少女の肉体はその意思を裏切り、淫らな欲情に燃え蕩けていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ。あ、あ……つく、んんんっ！」

唇をきつと引き絞ると、漏れだしてしまうのは甘い喘ぎ。しどけなく投げ出された肢体は粘濁にまみれてくねくねと踊り、肉感的な太ももを無意識のうちに擦り合わせて身悶える。切れ長の瞳は未だ意思の輝きを失ってはいないが、涙に潤み抑えきれない欲情を隠せていない。そんな蠱惑的すぎる好餌の前に、いよいよ魔物は本格的に動き出した。これまでは攻撃にしか使っていなかった触手を淫靡に震わせ、ゆつくりとゆつくりと、少女の肉感を確かめるように這わせていく。

「あ、ああ……あ！　いや……ふう……つく、ううん！」

ぬる、ぬる……にちゅ、ねちゅっ。

今までの激しい鞭打とはまるで違う。ねっとり粘りつくような、いやらしい動き。しつこく淫靡なその触り方に、欲情を抑えきれない少女は思わず甘い声を上げてしまう。アメーバならではのヌルヌルした感触と、ひんやりと冷たい肌さわりが、火照った肌に心地よい。（い、いやっ……ああ。ぬるぬるが……き、気持ち……いい……）

おぞましきや嫌悪感よりも、快美感が際立ってしまった。媚薬粘液で欲情させられた上に、ヌルヌルした触感に生来の性癖を煽られて、危険な恍惚が止められない。薄く目を閉じ、さらさら唇を噛み締めて身悶える。

「……！　だ、ダメ……違うっ！　負けない……こ、こんなので……ふあ、あ、ああっ!？」

それでも必死に理性に縋り付き、小さく首を振って快楽を否定しようとするさらさら。だが、そんなささやかすぎる抵抗では、陵辱の魔手は止めようがない。

ゆつくりと身体中を這いまわっていた触手たちは、いよいよその責めの手を少女の弱点へと集中させてきた。

必死に内股気味に閉じている太ももがこじ開けられ、ピキニの上から股間部分をヌルヌルつとスマタの要領で擦られる。

「ひゃ……ひ、ううっ！　いや、そ、そこは……あ、ああっ！」

ぬる、にゆるんっ！

もっとも大事な箇所を強く擦られ、たまらない快感が迸る。わずかに一撫でされただけで、さらさらは背筋をのけぞらせ悶絶した。

（うあ……こ、こんな！　わたしの身体、敏感になりすぎてる！）

媚薬粘液の効果は、予想をはるかに越えていた。粘液まみれの肉体は自分のものとは思えないほどに感度を増しており。僅かな愛撫でさえ信じられないほどに感じてしまうのだ。

（だ、ダメ！　こんな状態で……こ、これ以上責められたら……わたし……！）

ソクソクと湧き上がる、危険な期待感。媚薬に犯された肉体に引きずられ、秘めたるマゾヒズムがどうしようもなく止められない——とくん、とくんと痛いぐらいに鼓動を刻む乳房へと、今度は二匹の触手が絡みついた。

「うあ……ああっ！ やあ、む、胸にまで……はああ、ん、んんっ！」
にゆるっ、むにゆううううう！

根本から搾り上げるように、二本の触手が双乳に絡みつく。火照りきつていた乳房は揉みこまれるたび柔らかきに形を崩し、触手の愛撫を従順に受け入れてしまっていた。触手が蠢く度にむにゆり、むにゆりと悦ぶように乳房が弾み、甘い乳悦が牝肉全体に木霊する。

「はああ……あ、ああっ！ だめ……む、胸……つくううん！ そんな、むにゆむにゆつつて……はああ、あ、ああああんっ！」

待ちかねていた発情おっぱいをねつとりと可愛がられ、たまらない快感が止まらない。耐え難い乳悦に、さらさらは肢体をくねらせて悶絶した。身悶えるたび両の乳房がぶるんと揺れ弾み、いつそう触手が食い込んで甘すぎる乳悦が広がっていく。

（うああ……だ、だめ！ おっぱい……か、感じすぎてる。こんな……こんな続けられたら……も、もう……！）

もう、まともに理性が保てない。搾乳責めと同時に股間での摩擦運動も激しさを増し、にゆるん、にゆるんと何度も何度もスマタを繰り返されて可愛がられた。薄すぎるビキニ鎧では僅かの防御も期待できず、甘すぎる刺激が直接急所へと浸透してしまう。むしろローションで濡れた布地が肌に吸い付く感触が、フェティッシュな心地よさをいや増してしまっていた。

そして魔物の触手の責めは、単純な愛撫だけにとどまらない。ゲル状の粘塊である触手は、常に大量の体液を吹き散らしている。愛撫と同時に媚肉へとたつぷりと塗りつけられていくローションは、すべて魔物の体液と同じ媚薬を含んだ代物なのだ。

執拗な搾乳でたつぷりと蕩かされた乳房へ、あるいは陰湿な摩擦で責めぬかれた秘唇へと、直接ヌルついた媚薬が擦り込まれていく——
「はあ、はあ、はあ、はあ……あ、あああっ！ いやっ、ま、また……

……ぬるぬる、い、いっばい……ひううう、ん、んんっ！」
ぬるっ……ぐちゅっ、にちや、ぐちゅ、にちゅ！

いやらしい粘音を立てながら、たつぷりと塗り込まれていく媚薬粘液。ただでさえ熱く火照りきつていた肉体にさらなる追い打ちをかけられ、少女の女体は加速度的に官能を増していく。

「はううっ……だ、だめえ！ そ、そんなに塗りこまないで……あああっ熱いのっ、胸も、あそこも……あううう、はっああああん！」

触手愛撫で蕩かされた媚肉にたつぷりと媚薬粘液を塗りたくられ、いつそう感度を増した弱点を念入りに可愛がられてそれまで以上感じさせられる。そうかと思えば休む間もなくヌルヌルと体液を擦り込まれ、快感の虜と化した女体はいっそう肉悦に抗えなくなっていく——終わることなく快感のループに、粘液まみれの身体を震わせて悶え泣くさら。ローションじみてヌルヌルした感触それ自体までもが心地よすぎて、もうどうやっても意識を快感から切り離せない。

「あ、あ、ああっ！ も、もうこれ以上はだめえ……ゆ、許して、そ、そんなにヌルヌルされたらあ……ふあああ、あっああああっ！」

ぬるるるる、にゆるっどびゅどびゅどびゅどびゅ！
愛撫を繰り返すゲル触手から、白濁した大量の粘液がぶちまけられた。これまでのものよりもずっと濃厚なそれは、凄まじい毒効をもつて少女の官能を蹂躪する。快楽神経そのものがドロドロと蕩け、身体中の性感帯が自分でも信じられないぐらいに感度を増してしまう。

ビキニ越しにつんと隆起してしまっている乳首をクリュクリュと弄られ、あるいは固く勃起してしまっているクリトリスを刺激されれば、
もう——！

「ひい……イ、イイツ！ だめっ、そ、そこダメ……敏感すぎるのに、い、今は感じやすすぎるのに……ふああっヌルヌルしながら弱いところいじめるのだからだめだめ許してええ〜！」



意識が真っ白に飛びそうなほどの魔悦に、顔を逸らして感じ入る淫乱フアイター。端正な美貌は快楽に蕩けきり、涙に潤む瞳に理性の光は残されていない。おぞましい粘悦に溺れる淫らな表情には、理的な少女の面影は少しも残されていない。なかつた。

（あああつ……だ、ダメ！ もう耐えられない、溺れちゃう……このままでは……わたし、お、随ちちやう……っ！）

それでもわずかに残された人間としての尊厳が、怪物に墮落させられる屈辱を否定する。いやいやとかぶりを振って快楽を拒絶しようとするささらだったが、それを許すような魔物ではない。

必死で奥歯を噛みあわせて理性を保とうとしていた少女の唇へと、一際野太い触手が無理矢理にねじり込まれていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ……ふううっ!? いや……ん、ぶっ！」

ぬるっ……じゅぶっ！ たつぶりと粘液を滴らせた野太い触手が、少女の唇を力任せに蹂躪する。なんとか口を閉じようとするささらだったが、もはや自由の効かない身体ではまったくの無駄な足掻きだった。可憐な唇は容赦なくこじ開けられ、狭隘なお口は野太い肉塊ではんぱんに肉詰めされてしまう。

「んぶううっ……んう、んむうううっ！ んくうう……ん、んんく！」

咄嗟に吐き出そうとするささらだったが、怪物の力に敵うはずもない。野太い触手にズボズボと喉奥までを犯し抜かれ、大量の媚薬粘液を食道へと直接注がれた。さらには射精と同時に猛烈なピストンで喉奥までを犯しぬかれ、容赦なく口壺内を犯されまくる。

「ひうっ……んぶう、んん、んんんんっ！ いやあ……んむ、ごくっ。んむ、んぐ、んっんんんんく！」

ジュボツ、ジュボツジュボツジュボツ！ 息が出来ないほどの深さまで挿入され、そのまま一気に引き抜かれて食道から口腔までを磨かれる。涎にまみれていた舌をぐちゃぐちゃと摩擦され、味蕾

に直接媚薬粘液を塗りこまれた。ドロドロと濃厚な白濁を流し込まれるたび、苦しさよりも甘い陶酔に脳髓を蕩かされていく。

（うああつ……す、すごい！ こ、こんな……苦しいのに、ヌルヌルが気持ちよくて、ドロドロしたの美味しくて……頭が、溶けちゃいそう……！）

おぞましいバケモノに、まるで性玩具のように口壺を犯されているのに、それが嬉しくてたまらない——身体の外からだけでなく内側までも媚薬粘液に犯しぬかれ、思考までもがマゾヒスティックな魔悦に溶かされていく。

「はあ、はあ、はあ……あむ、んむっ！ ごく、ごく……ん、んんんっ。んはあ……あむ、んむ……んんんんっ！」

無意識の内に自ら触手に舌を絡め、喉を鳴らして白濁を嚥下してしまふ淫乱戦士。苦しくて気持ちよくて美味しくて、意識が朦朧として定まらない——

（あ、ああ……だめ。抗えない、抵抗できない。わたし……このままじゃ、も、もう……！）

身も心も、ヌルついた快楽に絡め取られて溺れていく——もはや抵抗する術も、いや意思さえもを失った敗北の戦士に、魔物がいよいよ最後の触手を伸ばす。

スライム状の巨体から伸ばされた、一際太く長い触手。粘塊ではあるが相応の硬度と質量を保ったそれは、勃起した男性器にも似ていた。見るからに野卑で淫靡な肉棒が狙うのは、口辱の少女に残された他の肉穴だ。即ち——

「ふむう……ん、んんんんうっ!? いやあ……そ、そっちは……あ、あああつ！」

亀頭状に膨らんだ先端部が、肉感的なヒップへ押し当てられる。無防備にも剥き出しになっている尻たぶが左右に押し開かれ、その奥で

すぼまった尻穴へ、にゆるにゆるとローションが塗りたくられた。もうすっかりクセになってしまっているヌルヌルに身悶えた瞬間、野太い先端部が力任せに押し入れられる。

「ひっ……あ、あ、ああっ！ いやあ、そ、そっち……お尻……つく、くうううんっ！」

むにゆるっ……ずぶっ、ずぶぶぶぶぶ！ 狭隘な尻穴よりも遙かに太い肉棒が、容赦なく少女の腸内へ打ち込まれていく。スライムならではの可塑性を生かしむにゆるむにゆると変形しながら、腸壁の隅々までもをびったりと満たしながら挿入されて、大量の粘濁が腸粘膜へと塗りたくられる。

「んはああ……あ、あ、ああっ！ お、お尻……んんんっ！ いやあ、お、お尻までぬるぬるう……んはあ、ふ、ふといのに、ぬるぬるして……き、きもちいい……いいっ！」

裂けそうなくらいに太いのに、痛みなど少しもない。あるのはただ、ぬるぬるとした粘塊と粘膜とがこすれ合う、至上の快美感のみ——

（あ、あ、ああっ！ だめ……こ、これはだめ！ ぬるぬるしたの気持よすぎて……こんな、お、お尻なのに、こんなの……お！）

大好きなヌルヌルした感触が、自分の体内で暴れている——倒錯したフェティシズムを満たす粘悦に、ヒップを揺すって感じ入る変態フアイター。同時に、これまで執拗なスマタを繰り返してた触手も踵を返し、すでにたつぷりと濡れている秘唇へとその先端を潜り込ませた。

「うあっ……あ、あん、あんっ！ そ、そっちもお……ぬるぬる、き、来ちやうの……ぬるぬるしたの、入ってきちやうの……おおっ！」
にゆるるるる、ずぶ、ずぶぶぶぶぶっ！

これまでの執拗な愛撫ですでに落ちきってしまった淫乱花は、愛しの粘塊触手を嬉しそうに迎え入れた。柔らかな秘唇がくばあつ、と押し開かれ、自分の腕ほどもある肉棒を美味そうに飲み込んでいく。

「うああ……ああ、ああ、あああっ！ ふ、ふとい……おっきいの、ぬるぬるなのお！ にゆるにゆるって動いて……あはあ、お、奥まで来てる……ううう！」

ぬちや、にちや、ぐちやっぐちやっぬちやっ！

しとどに濡れた秘粘膜と、粘液まみれの粘塊が、淫靡な粘音を立てて擦れ合う。アナルに挿入された時と同様、スライムローションを肉壁の隙間一つ一つにまで塗りこまれながら、肉孔全体をくまなく可愛がられた。ヌルヌルと変形する肉塊で膣孔をびっちり満たされ、龟头状の先端が何度も子宮口へと突き当てられる。

「ひい……ひい、ひい、ひいひいんっ！ お、奥……ぬるぬるしたの奥まで来てるのお……ふあああこれずるい、ぬるぬるしながらじゅぼじゅぼなんて……はああ、あつあああくくく！」

深いピストンで性粘膜をシゴかれながら、ぬるぬるした龟头に子宮口を何度も何度もキスされる——泣きたくなるほどの粘悦に、さらさらは自ら腰を振りたくって懊悩した。

（す、すごい……いい、気持ちいい！ 前も、後ろも……にゆるにゆる、いっぱい！）

薄肉一枚隔てただけの双穴で、同時に響く粘悦のハーモニ。入れ違いで交互に抜き差しを繰り返され、それぞれの粘膜をねつとりと執拗に可愛がられる。アナルから一気に引き抜かれて排泄欲を煽られながら、子宮口までを一息に突き上げられる被虐感といったら、もう——！

「んああっ……い、いいっ！ すごお……ひ、んむ、んむうっ！んあああ、前も、後ろも……お、おくひもっ、すごすぎる……ううう！」

あさましい喘ぎを吐き散らす口壺も、激しいピストンで蹂躪される。前も、後ろも、お口までも——媚薬粘液に薄かされ怖いぐらいに敏感になりすぎている3つの穴をすべて同時に可愛がられ、気も狂わん

ばかりの快感が連続しすぎて終わらない。

「んはああ、ああっ！ うああっまたぬるぬるいっばい……あむ、んむ、ごくっ！ んはああ……す、すご……んむ、ごく、ごくっ！」

ドクッ、ドクッドクドクドクドク！

喉奥にまで突き込まれた触手に大量の粘液を注ぎ込まれ、吐き出すこともできないように食道にそのまま流し込まれた。咽そうなほどに濃厚な白濁媚薬を嚥下すれば、お腹の中から全身が燃えたぎって蕩けてしまう。膣も腸管も怖いぐらいに感度を増し、触手ピストンで肉壁を抉られるたびに狂いそうなほどの快感が迸った。

（ああっ……だ、だめ……だめえ！ 身体敏感すぎて……ぬるぬるしながらずぼずぼされるのすごすぎて……わたし、もう、もう……！）

「イ、イクッ……んう、んぶううっ！ こんな……ぬ、ぬるぬる気持ちよすぎて……わたし、も、もうイクちゃう……ううんんっ！」

ソクソクと駆け巡る、マゾヒスティックなアクメの予感。ローションまみれの肢体を震わせ、襲い来る絶頂の予感に震える淫乱少女。

果たしてその瞬間に、愛しの触手たちもまた、全力の射精で応えてくれた。腸奥へねじり込まれた触手がピクピクと震え、子宮にびったりと吸い付いた龟头がドクンドクンと脈を打つ。そして――

ドビュッ、ドブッドブッドブッドブッドブ！

「ひ!? や、あ、あああっ！ で、出てる……前も、後ろも……ひあああっ濃いっのっ、いっばい、いっばい……いっばい……！」

ドブツ！ ドクッドクドクドク！ ブツシャアアアア！

前後の穴に、まったく同時に注がれた灼熱の白濁。苛烈なピストンで何度も穿り返されながら、濃厚極まる子種汁をたつぷりと注ぎ込まれ――すでに達しかけていたささらの意識は、

一気に快樂の果てへと押し流された。

「ひい、イ、イクッ……イククうううう！ 前もイク、後ろもイ

クっ……んはあああっお口もいっばい、ぬるぬるでいっばいにされて……全部一緒にイクイクイクイクイっちやうううううう！」

口壺でも、アナルでも、そして子宮奥でまでも――ありとあらゆる牝穴が、同時に快樂に屈服する。三穴同時の射精アクメに、ささらはあさましいアへ顔を晒してイキ狂った。

「んひいイッ……イ、イイッ！ んはあああっすごい、ま、まだ動いてる……んはあああっまだイってるのに、ま、まだいっばいぬるぬる出てるのそんなにされたら何度も何度もイっちやうのおおっ！」

少女が達しても、触手達の責めは終わらなかった。絶頂途中で痙攣し続ける肉穴に、休む間もなく粘液を注ぎながらかき混ぜまくる。入りきらなかった白濁が、口からも秘部からお尻からもドバドバと吹き出し続ける。

「はああ、ま、まだ出てるう……ぬるぬるいっばいすぎて……んひい

いっばいまたイクッ！ ぬるぬるすごすぎて……ささらっ、も、もうぬるぬるでイクのくせになつちやうイキまくつちやううううう！」

三穴からはしたなく白濁を吐き零しながら、背筋を仰げ反らせてイキ狂う敗北のファイター。

もう、身体も心も完全に屈してしまっ、少しも快感に耐えられない。

（ああっ……だ、だめえ。気持ちいいの……ぬるぬるにイカされるの

気持ちよすぎて……わたし、もう、もう……！）

抗えない、抗えるはずもない肉悦の嵐。

大好きなぬるぬるに可愛がられて、何度も何度も女としての至福を味わわされ続ける――こんな快感、耐えられるはずがなかった。

「らめえっ……お、墮ちちやう！ わたし……もう、もう……ふああああまたイク、イクイクイクぬるぬる良すぎてもうらめなのおおっ！」

もう何度目の絶頂かもわからない、どこでイっているのかもわから

ない。

身も心も落ちきった——ささらが迎えたのは完全なる敗北。
だが氷の美貌に浮かぶのは、至福の笑みだった。

■あとかき■

竜胆

ようやくヌルヌルした生き物が好きなさーりゃんを描くことができました！

短いですが……

一応言っておきますと、ささらがヌルヌルした生き物が好きなのは公式設定です。

素晴らしいですね。もっとヌルヌルした生き物と絡ませてあげなければ……(´ω´)

13PからのSSはお馴染みの黒井弘騎さんをお願いしました。ありがとうございました！

さて、次回ですが、もう一方のルートを描きたいと思ってます。丸呑みです(´ω´)

魔胎都市もまだやりますのでよろしくお願いします。

奥付

さーりゃんと卑猥なダンジョン

2013 8月19日 2版発行

○発行

RadicalDream

HP URL <http://www.rindou.sakura.ne.jp/>

E-mail rindou@rindou.sakura.ne.jp

○発行者

竜胆

○印刷会社

株式会社 プロス

●18歳未満の購入・閲覧を禁止いたします。

●無断複製・転載及び公開を禁じます。